

---

# 微かに吹く風：零・ZA・音編

零・ZA・音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

微かに吹く風：零・ZA・音編

### 【Nコード】

N7587A

### 【作者名】

零・ZA・音

### 【あらすじ】

勉強の合間：真子に誘われて、神社の裏山にやってきていた。そんな裏山で過ごしたある日の出来事。

## (前書き)

同じあらすじと登場人物で書こうという小説の第五弾。「グループ小説」で検索すると今までの小説を見る事ができます。是非、ご覧下さい。

爽やかに吹き抜けていく風は、緑の匂いを残して過ぎていく。

空からは眩しいくらいに輝いている太陽の熱が、これでもかというくらいに降り注いでいた。

しかし、ここは森の中　　その暑さも幾分かは和らいでいる。

「暑いよ…啓」

「少しは涼しいだろ。直射日光を受けるよりは…」

「それは屁理屈と言うものだよ…啓君」

「気色悪い呼び方をするなよ…真子」

指をチチツツと揺らして俺を見ている真子だが、どこの探偵気取りだろうか…。

森の中を歩く俺達の他には誰もいない。ここは神社の裏にある小さな山。

あまり人が出入りしないが、たまに山菜取りなどに入っていく人を見かけるくらいだ。

「うう…これなら部屋でエアコンにあたっていた方がいいよお」

「あのなあ…お前が言い出したんだろ。裏山に涼みにいこうって」

「そうだけどさあ…」

頂垂れている真子は、トボトボと重い足取りでユラユラと歩いていた。

どう見ても危ないのだが、大丈夫だろうか…。

「よしっ！、この先に小川行こうっ」

「いきなりだな…」

急に元気になった真子は、駆け出しそうな勢いで前を歩いて行く。

「いいから行くよっ！ほらっ、早くっはやくっ！」

「はいはい…」

それについていく俺も俺だけ…。腐れ縁だから仕方ないか…今更の事でもないし…。

ズンズンと歩いて行く真子だが、急に立ち止まり一言

「暑いっ！」

振り向きざまにそう言って、スカートを翻してまた歩いて行ってしまった。

もう勝手にしてくれと言う気持ちで、俺は後を付いていく。緑の小道をマイペースに進んでいく俺と

忙しなく進んでいく真子。そんなに急ぐと絶対にバテると思うのだが…。

まあ、本人がそれをしている訳だから俺がとやかく言う事ではないけど、バテると後が大変なんだよ…俺が。

そんな事を考えながら歩いていると、視界が開けてきて一気に光が差し込んできた。

眩しさに目の前が真っ白になって、次に聞こえてきたのは水の流れる涼しげな音だった。

「遅いよお〜、啓」

早速、小川のほとりで足をつけて遊んでいる真子が、少し膨れっ面を下げて俺を見ていた。

「お前が早いんだよ…ったく、そんなに急いで行く事ないだろ」

「だって、暑いんだもん。少しでも早く涼みたいのは人間の性だよ」

「かなり大きく出たもんだな…」

「ああ、もうっ！ウダウダ言っただけで座るっ」

ピシッと指差して俺を睨みつけていたかと思うと、いきなりニッコリと微笑んで隣に座るように促してくる。

どうにもこのギャップには、未だに慣れないがどうしても逆らえないのだ。

これも あれなんだろうか…主従関係？そんな訳ないか…。

あれやこれやと考えてもしかないので、俺も同じように水面に足を入れて涼を楽しむ事にした。

「気持ちいいねえ…冷たくて、ひんにやりで」

「ひんにやり…？」

「ひんやりの最上級っ！」

「意味わかんねえよ」

そんな俺の言葉など、まったくと言っていいほど聞いては無い。楽しそうに足を水面につけては揺らしている。

いつものやり取りといつもの光景。これがいつまで続くのかは分からないけど…。

その光景は夏の茹だるような暑さの中でも、どこか涼しさを運んできてくれるものだった。

「ねえ…勉強、進んでる？」

ぼんやりとその光景を見ながら考え事をしている俺を、現実に戻すような質問を浴びせてくる。

「んっ…まあまあかな。夏休みの宿題はもう少しで」

「そうじゃなくて…受験勉強の方だよ」

「そつちか…まだ何もやってない」

その言葉に何とも言いがたい表情をしている真子。

俺達は今年、受験生だ。夏とはいえ、本来なら遊んでいて言い訳でもない。

まあ、今まで勉強していたので、今は息抜きの最中な訳だけど…。

「啓は、どこの高校受けるの？」

「んっ…まだ決めてない」

「のんびりしてるね…大丈夫なの？」

「たぶん　　そう言えば、真子はどこを受けるんだ？」

ビクッと肩を震わせて俺と目を合わせようとしない真子。なんか聞いてはいけない事を聞いたのか？…俺は。

「私は　　私も、まだ決めてない」

「決めてない　　って、大丈夫なのか？っておいっ」

そう言う俺を睨んでプイツとソツポを向いてしまった。なんで怒ってるんだ…？

真子は、こう見えても頭がいい　　順位で言えば、真子は学年トップ10に入っている。

一応…俺もそれなりの頭を持っているが、それでも真子に追いつくのはかなり苦労している。

真子の成績なら、本来はどここの高校でも大丈夫だろう…それにしてもなんで決めてないんだ？

もう直ぐ夏休みを終わりに近づいて、二学期になれば受験生はいやでも、勉強漬けの毎日だ。

それが嫌で、決めてないとか？…そんな訳はあるはずがないか。

「決めてない人に言われたくないよ。　　って、一応、候補はあるよ」

そう言っつて、俯き加減にぼそぼそと囁くように話し出した。

真子の行きたいと言っている高校は、近県では一二を争うほどの進学校。真子の成績なら大丈夫だろうが

俺の成績では、ちょっと厳しい。受かるかはギリギリのラインだろうな…。

「すごいじゃないかっ！　　ちゃんと考えてるのなら、先にそう言えよ」

「でも今の成績じゃギリギリなんだよね。私の成績だとね」

「私の」をかなり強調して言っつて真子は、俺をみて何かを待っている。

「じゃあ、頑張つて勉強しなくちゃな」

しかし、俺の言った事が気に入らないのか、真子はため息をついて

「なんで、気づいてくれないんだろう…この馬鹿は」

思いつきり馬鹿にされてしまった。

「失礼な奴だな…お前は」

「啓に言われたくないよ」

それから、また足をユラユラと水面で遊ばせていた真子は急に顔を上げて俺にこう言った。

「ねえ…啓」

「んっ…？」

「もし…啓が私と一緒に高校に行けたら どうする？」

そう聞いてきた真子の顔は、何かを期待している そんな表情をしていた。

「俺が？…真子と一緒に高校に？ 無理だろう。今の成績じゃ、

とてもじゃないけど…」

「はあ…どうしてそうなのかなあ、啓…」

落胆の表情をにじませて、首を振っている真子は遠くを見つめるように目を細めて

「 くらい言えないかな…この朴念仁は」

俺に聞こえるか、聞こえないかと言っくらの声で囁いていた。

その顔は、どこか分かりきっているという顔をしている。長い付き合いだ 今更、隠し事もないだろう。

お互いに知らない事など無いくらいに知り尽くしているからこそ、聞けない事も言えない事もあるものだ。



例え、今囁いた事が風に乗って、俺の耳に届いていたとしても

「帰ろうか…真子」

「なんでよ？…もう少しぐらいいいじゃない」

「勉強しなくちゃいけないだろ」

「急に真面目になったね…啓」

呆れたように俺をみている真子だが、その顔はいつものように笑っていた。

俺はこの笑顔が好きだ。もう何年も前からそう思っていた…一人の女の子として　　だ。

本当は、高校も決めていないわけではない。真子と一緒に高校に行きたいと考えていた。

でも、それを当の本人に言うのはひどく恥ずかしい。何もかも見透かされているようで…。

この先も、俺は真子と一緒にいたい…何年も、何十年も　　緒に…。

「あと三年…腐れ縁を続けるんだろ？」

「えっ…？」

言っていて恥ずかしくなった俺は、足早に立ち上がり歩き出した。それを見ていた真子も、目をパチクリとさせていたが言葉の意味を理解したのか

「そうね…あと三年、幼なじみ続けるのもいいかもね。その後は

—

「その時決めればいいさ…」

嬉しそうに微笑んでいた。

照れ臭そうに俺の隣に立ち、一緒に歩き出した真子に…

「嬉しい　　だろ？」

さっき聞こえた囁きをそのまま返したら、恥ずかしそうに俯いて

「……バカ」

そう言って、そっと手を握ってきた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7587a/>

---

微かに吹く風：零・ZA・音編

2010年10月9日02時02分発行